

司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズは全部で43巻あるが、20番目が、「中国・蜀と雲南のみち」である。この本の書き出しは、「四川省は、古来、巴蜀とよばれた。巴は現在の重慶を中心とし、蜀は現在の成都を中心とする。・・・」で始まっているが、私の長年の夢であるこの蜀への旅がスタートしている。今、前面のスクリーンに飛行経路が映し出されている。見ると、上海→南京→合肥→武漢と長江の流れと絡み合うように飛び続けている。そして重慶の手前で右に針路をとり、成都に機首を向けた。窓外は真っ暗。6時間余りのフライトはさすがにこたえた。NH947

去る1月30日、成田空港第一ターミナルから全日空NH0947便に搭乗し、定刻より15分遅れの17時30分頃離陸した。この便は、昨年(2011年)6月に開通したばかりの直行便である。これまでも蜀の地にはいきたいと思っていたが、北京とか上海で乗り換えねばならなかったので二の足を踏んでいたが、直行便が開設されたと聞き、このたびの旅行となったのである。NH0947便は、中央の通路をはさみ左右に3席ずつの定員120人乗りの小ぶりのジェット機である。それでもPRが行き届いていないのか、あるいはシーズンオフなのかかわからないが搭乗率は50%をかなり下回っていた。この路線が廃止とにならないよう願うばかりである。私は、中国の中部、南部には殆ど行ったことがないので今後その方面の旅をしたいと思っているが、成都に直行便があればアクセスがとて面白いと思うからだ。

さて、通路側に指定した自分の席に座ると、私の左右には中国人が乗ってきた。坐ると途端に大きな声でしゃべり始めた。離陸までの30～40分間ずっとしゃべりつづけるので、静かに旅をしたい私はいたたまれなくなり空中小姐(略して空姐ともいう)を呼んで別の席に換えてもらった。空姐はスチュワーデスのことであるが、席替えをお願いした空姐は当初日本人かと思っていたら、胸のネームプレートには「潘」と書いてある。アレッ? 中国人なのかと驚いた。この空姐の日本語はそれほど素晴らしかったのだ。それに立ち居振る舞いとい

うか、ちょっとした仕草が日本人とかわらない。空姐は日本人4人と中国人1人の5人だったが、皆対応が素晴らしく楽しいフライトとなった。

空中小姐でちょっと横道に逸れるが、中国語はどんな外来語——人名でも物の名でも漢字に置き直し、一つ一つ新たに作っていく。日本語にはカタカナがあるが中国語にはないので仕方ないのであろうが、ちょっと見ただけではわからないものが多い。

空中小姐はなんとなくスチュワーデスの雰囲気が出ているが、たとえばマクドナルドは麦当劳に当て字され、麦を扱う店なのかと思わせてしまう。私も大連で初めてこの看板を見たときには何の店かと思った。アメリカ合衆国は、美国だがアメリカ人はこんな綺麗な漢字を当てはめてもらいさぞかし満足していることだろう。ところで首都のワシントンは「貨盛頓」と書くが、都市のイメージとかけ離れていると思える。表記は一体誰が決めるのであろう。先日東京スカイツリーに行ってきたが、インターネットで調べると、中国語の表記を「東京天空樹」としようとしたところ、中国国内にすでにこの表記が登録されているので使えないとのことであった。今検討中のような。誰かのいたずらか、はたまた金儲けのためなのか・・・いずれにしても日本語はカタカナのおかげでいちいち言葉を作らなくていいので便利である。先人に感謝しなければならない。

NH0947便は現地時間の23時10分ころ〈成都双流国際機場〉に着陸した。中国国内で5番目に大きい国際空港とのことだが暗くてよくわからない。空港ターミナル内に足を踏み入れると、とうとう成都に来たのだという感慨にあふれた。入国審査はスムーズに行ったが、タクシー乗り場に着くとそこは結構な行列ができています。タクシーの数が少ないようだが電車やバスもないので仕方なく並ぶことにした。すると白タクと思いき男が近づいてきて、100円でどうかというので夜も遅いし、どうせ70～80元くらいはかかるだろうと思って乗り込んだ。白タクは夜の道をすっ飛ばし30分程度でホテル前に着いた。ホテルは、一品天下街

という大層な名前の広い通りに面していた。格林普蘭特酒店と名前もいかめしい。チェックインをして早く寝ようとフロントに行き、パスポートと旅行社から来たFAXを見せると私の名前が無いという。そんなはずはないと言ったが埒があかないので旅行社の大連支店の友人に電話するとようやくフロントからOKが出た。なぜこのような行き違いが生じたのか、説明もしてくれなかったが中国での旅行ではこの程度のことは別にめずらしいことではない。鍵をもらって601号室に向かった。やれやれと思い上着をハンガーに掛けて時計を見るととくに午前0時をまわっていた。

今回の成都旅行は、勿論三国志の遺跡や杜甫草堂などを見たいためであるが、もう一つ目的があった。それは王さんと再会することである。王さんとは2010年秋、日本で初めてお会いした。この時、田井さんから「和光大学を卒業した留学生のお母さんが来日されている。折角だから箱根に案内してあげたい。寺西さんも一緒にどうですか」とお誘いを受け、「わりい」会員のSさんと四人で秋の箱根を楽しんだのである。王さんは、結婚され日本に住んでおられる娘さんの出産の手伝いで来日されたのである。とてもおだやかで笑顔の素敵なお方で、初対面にも拘わらず前から知り合いだったような気がした。この度、田井さんに成都に旅行する旨を伝えると、「連絡しておくからお会いしてはどうですか」と言ってくださり、王さんと約1年3ヵ月ぶりにお会いできることになった。成都に着いた翌日電話すると、とても懐かしがって頂き、2月1日にホテルの前まで来てくださることとなった。

到着した翌日の1月31日は、時折日が射す暖かい一日となった。前述の司馬遼太郎の本の中で、同行した友人の話として、「四川の犬は太陽を見て吠えるというのです」と書いている。勿論誇張して書いているのだが、「四川の犬たちは地球のすべてが曇天であると信じて生涯を終える。まれに太陽が雲間からのぞくと怪しんで吠えるという



箱根小旅行をご一緒した王さん



杜甫の座像の前で記念撮影

ことらしい」とそのわけを述べている。したがって1月31日は天候に恵まれラッキーということらしい。成都は地形の関係で曇りや雨の日が多いと聞いてきたので、天気については万全の備えはしてきたが、いい天気で真冬なのに12～13℃まで気温が上がった。地図で見ればわかるように成都は四川盆地の中にあり、周囲は5千～6千米級の山々にぐるりと囲まれている。四川省の最高峰は7556米の貢嘎山(ミニヤコンカ)で、富士山のほぼ2倍の高さであるが、この四川盆地の一角に聳えている。日本国内には3千米を超える山は21座しかないが、四川省だけでこのくらいはあるのではないかと。日本人には想像しがたい地形である。気流がそれらの山々に当たって雨がよく降るらしいのである。

ホテル前からタクシーに乗り、まず杜甫草堂に向かった。現在の草堂は当然何度か建て替えられたものである。なにしろ杜甫は712年に生まれ、770年に亡くなっているのだ。今年が生誕1300年にあたる年でもある。彼は、58年の人生の中で4年間この成都で生活したが、ここで240編余りの詩を詠んでいる。一番有名な「春望」という題の詩、〈国破山河在、城春草木深……〉はとっても好きな漢詩であるが、この成都で詠まれた詩ではない。安史の乱(755年～763年)の時捕えられて長安の獄につながれ、その後脱出し転々とするがそのころ

に荒廃した長安を憂えて詠んだものである。余談だが、「春望」について漢詩の会で植田先生から解説があった。この詩は韻や平仄のきまりが極めて正確である上、遠景から近景に至る風景描写、そして心理描写が如何に優れているかを教わった。ご存知のように「詩仙」と呼ばれた李白とともに「詩聖」の杜甫は、唐代の詩人の双璧であるが、先生から解説を聞くとなるほど納得できた。

タクシーは杜甫草堂の入り口で止まった。入り口は平屋で横長の瓦屋根の建物で、上方に「杜甫草堂」と扁額が掛かっている。30元払って入ると、石の台座に大きめの杜甫の坐像(銅像)が置かれている。やせていて心なしか愁いの表情を帯びている。像の横に「第三届成都詩聖文化節」とのタテ看板が置かれていたが、第3回目のどんな文化祭なのであろうか。坐像の奥に向かうと、「大雅堂」と書いた大きな額が掲げられている立派な建物があった。中に足を踏み入れると、誰だったか忘れたが中国の歴史上の有名な人の銅像がずらりと置かれていた。

園内は竹林に囲まれている様子で、その中を人の高さよりいくぶん高い赤茶色の壁が長く続いている。いつかテレビかガイドブックかで見た風景はこれだと思うと、ついに夢が実現したのだとの思いが込み上げてくる。この美しい壁と覆いかぶさるような竹林と木漏れ日をカメラに収めようとするが、人の流れが途切れずしばし立ち止まった。ようやく人がまばらとなり急いでシャッターを切った。美しい石畳の道が終わるころ、広い庭が眼前に現



杜甫草堂苑内の美しい赤壁と竹林

れた。真冬なのにチューリップが綺麗に咲いていた。桜梅も黄色い花をたくさんつけていたが、これは盛りを過ぎていた。成都市は標高が4～500米のところにあるが、緯度は日本の種子島とほぼ同じなので、やはり東京よりは少しは暖かいのであろう。そしていよいよ草堂の前に来た。藁葺の如何にも草堂といった風情だ。浣花溪という場所に建てられたので「浣花草堂」とも呼ばれるそうだ。ガイドブックでは、「最初に作られた草堂の跡に北宋時代(960年～1126年)に祠が建てられた後、元から清代にかけて拡張され今の姿になった」とあり、この園内にはいくつかの建物があるが藁葺の草堂自体がいつの建物かはわからない。現代に生きる我々は、これを見ながら想像するしかない。草堂の中に入ると、書齋、寢室、台所などがそれらしく再現されている。

ところで、杜甫がこの場所で詠んだ詩に、「春夜喜雨」という詩があるが、この中に「錦官城」という言葉が出てくる。錦官城とは成都市の昔の名前である。錦城ともいう。このあたりは昔から絹織物が有名で、「蜀錦」と呼ばれた織物は中国三大名錦として天下にその名を轟かせた。それから錦官城または錦城という街の名前になったように思われる。市内を幾つかの河川が流れているが、錦江が市内を貫くように流れている。蜀の錦は、透き通るように綺麗であった錦江で洗われたようだが、今はさほど綺麗な川ではない。

草堂をカメラに収めてから、幽玄ともいえる竹林をなんども振り返りながら出口に向かった。

(続く)